柳生武藝帳

卷之二

五味康

柳生武藝帳

巻之二

翁陰し

五味康祐

柳生武藝帳

陰翁　二之巻

昭和三十一年十二月二十日　發行
昭和三十二年二月二十日　三刷

定價貳百六拾圓
地方賣價　貳百七拾圓

著者　五味康祐
東京都新宿區矢來町七十一
發行者　佐藤亮一
東京都千代田區神田神保町三ノ二三
印刷者　塚田重
印刷所　塚田印刷株式會社
東京都新宿區矢來町七十一
發行所　株式會社　新潮社
電話東京三四局代表七一一一(八)
振替東京八〇八番

製本　神田　加藤製本所

卷之二目次

初夜……七
御稽古……二〇
御脫(だつ)屣(し)……二三
江集結……四五
夜襲……五七
對決……七〇
弦月……八五
鴉の羽……九六
葡萄……一〇
繪圖……一三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

蘭の典侍……一三七
智慧袋……一四八
鍋島忍者……一六〇
虚無僧……一七一
上洛……一八四
篠の雪……一九四
雲助……二〇六
山伏……二一七
天道法眼……二二九
亂懸け……二四一

裝幀・挿繪　木下二介

柳生武藝帳　卷之二

初夜

家光が十六歳の尼僧に「手をつけ」たのは觀能の翌日で、豫め賴房と諜し合せて、夕景酉の刻（午後六時）に水戸屋敷へ臨んだ。

水戸家では既に饗膳の準備をととのえて賴房自らが迎え出る。家光と眼を見合せたとき賴房はニッコリ笑った。尼僧が伽の旨を承知したという意味である。さすがに、家光は胸をはずませたらしい。この日の御沓の役は堀田加賀守が勤めていたが、

「加賀、取らすぞ。」

玄關で脱ぐ時に家光は言った。履物を加賀守に與えるという意味である。一旦、將軍家の身につけられたものを賜るのは、品の如何を問わず大變に有難い事とされている。

「はっ。」と言って、脱ぎ捨てられた草履を加賀守は推し戴いた。

家光は數寄屋へ通った。直ちに膳部が出される。この日は松平筑前守、同じく伊豆守、立花飛驒守が供奉して來たが、偕に相伴にあずかった。

膳部がさがると、奥女中が花を捧げ持って來た。紅木槿である。家光みずから之を一節切の竹

簡に生け、ついで御炭をした。茶事が畢ると長袴に穿きかえて書院に渡る。ここで頼房から祝意の盃を獻じ、貞宗の刀を捧げた。

そのうちに猿樂がはじまった。『白樂天』『楊貴妃』『鵺』に、家光の所望で喜多七大夫が『柏崎』を舞う。その間にも再び饗宴がひらかれ、英勝院尼から家光に剪綵花の盞臺をささげた。英勝院とは曾て家康の寵を受け、子供のないところから、命に依って頼房を養子に迎えた於八の方である。家康寵愛の後に松平右衞門大夫正綱に下されて、正綱の妻となったが、夫を嫌い、ひと月ばかりで家康が取返したといわれる。――この比五十八歳で、尼僧を口說く役はこの英勝院が引受けた。

「程なく用意も整いましょうほどに、ごゆるりと――」

英勝院は盃臺を奉る時そう言って鐵漿の齒でニッと笑った。媼とは思えぬ艶めいた色氣がある。家光は視線の遣り場に困り、

「其許も息災で何よりじゃ。」

一いきに飲み乾した。英勝院に仕える常盤という老女が、其時書院に這入って來て、英勝院に近づき何か耳うちをした。

媼は聞いて、家光を見て、わらった。

年に似ず家光は赧らんだ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

此のとき家光は三十二歳である。まさに男盛り。

常盤が案内に立って、奥女中の掲げる雪洞に足許を照らされ、家光は長い廊を渡った。書院ではまだ猿樂がつづけられているので太鼓や笛が遠ざかって行く。家光のあとには御刀持ちと宿直の小姓二人が從った。鍵の手に廊下を曲ると、御簾の垂れた廣座敷があり、内らに行燈が灯っている。

其處が、寢所である。

二十疊ほどの廣さ。別に十二疊の控え座敷があり、ほそく蚊遣りの煙りがゆれ昇っていた。先導の常盤と、雪洞を掲げ持った女中は偕に控え座敷の敷居際で停って、廊下に坐り、手をついた。その前を家光は踏み通った。小姓二人がつづいた。

尼僧は、顏も上げずに廣座敷の中央に襟足を眞赤に染めて、深々とうなだれている。袈裟でなく、薄衣姿である。彼女の前には既に斑枝花の入った揚疊を敷いて、その上に南を頭にして寢具がのべられていた。水淺黄の羽二重の敷蒲團——一枚である。それに表が花色縮緬、裏が御召茶の眞綿の薄い掻卷が添えられている。枕は蒲團の上に男女二個、別に、男物の括り枕のみ五、六個用意されている。將軍は通常、厠などへ起った時には枕を替えるのである。御寵愛のあまり、夜中に兩三度も厠へたたれる場合は、それだけ枕も替えられる。女性にとっては、將軍家が幾度枕を替えられたかは閨事の度數と一致するので、枕の替わる數の多いのは非常な自慢になるわけ

だ。

家光は尼僧の前へツカツカと歩み寄ると、立ったまま默って見下した。彼女は一そう身を固くしていよいようなだれる。心なしか兩肩がふるえ、ひらいた襟もとで乳房の二つの隆起がせわしく息づいているのが上から見下せた。

「予が、予が怕いか？」

生唾をのんで、家光は言った。その聲もわずかに嗄れた。

尼僧は默って頭をふる。そして、一そう肩をすぼめる。

「ならば面をあげい……」

せき込んで家光は言ったが、益々尼僧は身を低めた。家光の咽喉が鳴った。

小姓二人は、その家光の直ぐ背後で、一人は御刀を捧げ、他は素手で平伏している。フトそのふたりへ家光が振返った。

「——もうを致せ。」

はっと應えて、刀持ちは顔を俯せたまますり足で進んで床の間の刀架に差料を架ける。その間に家光は脫衣する。御側寢の小姓が之を疊んで、黑塗の定紋附き御召臺に載せ、紫の袱紗を掛けてから寢具に沿うて東の方に備える。家光の寢衣を刀を架けた小姓が捧げ持って來る。鼠色羽二重に緞子の附紐のある單衣である。

尼僧は、この間うな垂れつづけたまま。

家光が寢衣に着替えおわると、小姓の一人は習慣で行燈を障子の外に置こうとしたが、
「その儘でよいぞ。」
家光は低く言った。それで、小姓は行燈の一方のみを開けて頭の方に据えた。枕許の黑塗蒔繪の鼻紙臺が灯に映えた。御側寢は頭の方の長押へ寄ってサッと獏の繪の幅を懸けた。世俗に獏は夢を喰うという諺からの習慣である。
控えの間に退って、太刀持ちは一禮をして、廊下へ去った。入れかわりに常盤が『床盃』を白木の四方に用意して這入って來る。女中は夙く退出している。
「さあ、上樣のおそばへおゆきやれなあ。」
常盤が尼僧の膝からふるえる手をとって、既に寢具に坐った家光の傍らへ連れて來た。ここで土器で形ばかりの盃の受け渡しがある。
尼僧は、十六歳にしてはからだつきの見事に成熟していることが身近で見ると一そうよく分った。まだ顏は得あげないが、素直に盃を唇に觸れた。睫毛をふるわせ、目を瞑って飲みほす。下ぶくれの豐かな頰が血を退いて白い。家光の瞼が却って上氣していた。
御側寢の小姓は、常盤が寢所から退出して來ても控えの間で寢所に向って兩手をついて低頭しつづけていた。常盤は、これも寢所から姿を消すのではない。尼僧の事ゆえ、よもやとは思っても、萬一お上に非禮のことがあってはならぬので、障子の外の廊下で事の濟むまで附いていようと英勝院からいいつけられている。それで、廊下に控えた。

「……名は、何と申すか。」
家光はそっと尼僧の膝の手を把った。
「梅でおじゃりまする。」
消え入らんばかりの聲だ。化粧はしていない。唇がからからにかわいていた。
「梅か、近うまいれ。」
「あ、……あい。」
肩からくずれ落ちるように家光の胸に抱かれた。
男の手が、あせり氣味に懷ろをさぐる。ぎくっと少女は痙攣をした。
「……はぁ。」
一心に目をとじていて、思わず熱い息を吐く。薄衣の裾前が亂れ、匂うように白いふくらはぎが覗いた。流石に公卿の女で、身を動かすと全身から馥郁と香が匂う。家光は腋へじかに手を差し入れ、しずかに、しずかに少女を仰臥させた。
自分も身を横たえる。煽りで行燈の灯が搖れる。
この時小姓が氣配を察してスルスルと近寄り、蒲團の裾に廻って、早や絡みあう男女のおみ足の足袋を脱がせにかかった。どちらもきゃらこの白足袋である。
再び控えの座敷に戻ると、小姓は其處で、寢所に背を向け太刀を抱いてごろりと腕枕をした。
——以來、朝まで彼はそうして不寢の番をする。

廊下の常盤は、事の無事に濟むのを確かめてから、忍び足で廊下を退去したが、英勝院の許へ戻って、

——矢張り、「お前」に手をお入れなされたとき、大そうお痛みの御様子でした。

と報告した。（「御後に」といえば痔の類を指す。）

又御側寢の小姓は、翌朝、ひそかに賴房から訊かれて、こう答えている。

「お上には大へん御滿悅の御樣子にて、尼どの兩三度、低く絹を裂く如き忍び聲をおあげなされ候。『予が情けは未來永劫かわらぬぞ。予が愛しむは、そちはじめてじゃ、初めてじゃ』と繰返し申され、薄明に及んで更に兩度御枕をお替えなされてござる——。」

家光が歸城したのは翌朝卯の下刻（午前七時）尼は、卽日還俗して、千代田城の大奥に入り、於萬と名を改めて家光の侍妾となった。賴房の生母養珠院がもと於萬の方といったので、その名を貰ったのである。養珠院の於萬の方は、はじめ、子のないのを嘆いて身延山に參籠し、祈願の甲斐あって賴房、賴宣を產んだのは有名な話だが、尼僧・梅もこれにあやかるようにと此の名を繼いだわけである。

それから三日あまり經った。

大久保家では、相變らず暑さで氣の鬱した連中が、それぞれ、氣のあう者同士で部屋にかたま

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo